

妹扱いはもうおしまい、

お姉様の婚約者ではありません。

シルヴィア・バートン

◆◆◆
ジェフリーの母方の従妹。
ミュリエルと親友であることを
認めないツンデレ。

アルベルト・ バレンシュタイン

◆◆◆
ジェフリーの親友。
近衛騎士団に所属し、
第二王子の護衛を務める。

ヘレナ・ブラッドレイ

◆◆◆
ミュリエルの姉で
ジェフリーの婚約者だった女性。
妹とも婚約者とも良好な関係だった
はずだが結婚式当日に逃亡する。

ジェフリー・ オーレンドルフ

◆◆◆
ミュリエルの夫。
元は彼女の姉ヘレナと婚約していた。
妻に対して
『義妹になるはずだった女の子』
という扱いを続けている。

ミュリエル・ オーレンドルフ

◆◆◆
旧姓はブラッドレイ。
姉の代わりに公爵家へ嫁ぐ。
夫であるジェフリーに対して、
毎日のように熱烈な愛を
告げている。

第一章

ヘレナ姉様が姿を消したのは結婚式の当日の朝のことだった。世界で一番幸せな花嫁になれる日に、彼女は消えたのだ。今までジェフリー兄様から贈られた宝石たちを持つて、秘密の仲だったらしい庭師の男と共に。

あり得ない、前代未聞の大スキャンダル。挙式予定の教会の控室は混沌に包まれた。

『ふざけないで！ どうしてくれるのよ！』

『この縁談は陛下が直々に調えられたものなんだぞ!?』

『申し訳ございません。申し訳ございません』

飛び交う怒号に宙を舞う花瓶。額を床にこすりつけて謝罪する父に、姉様の裏切りに怒り狂う公爵夫人とその親族。公爵閣下は父の頭を蹴り飛ばそうとする妻を宥め、突然愛する人に裏切られた兄様は魂が抜けてしまったように部屋の片隅で項垂れている。

当時十二歳だった私は、床に散らばった花瓶の破片を集めながら、式の出席者リストを思い出して、静かに息を落とした。

国王派筆頭であるオーレンドルフ公爵家と、教皇庁と強い繋がりを持つブラッドレイ侯爵家。不安定な情勢の中、王権の安定のために結ばれたこの結婚は多くの人に注目されている。そんな結婚

を直前になって反故にするなど、謀反の意があるとられても文句は言えないだろう。最悪の場合、家族全員絞首刑だ。それだけは避けたい私は集めた破片を使用人に渡し、難しい顔をして何かを決めあぐねている公爵閣下の前に立った。そして決断を迫るように、あるいは、私の覚悟を見せつけるために、微笑んでみせた。

『どう足掻いても、この場を切り抜ける策は一つしかないか……』

閣下は額を押さえてしばらく悩んだ後、申し訳なさそうな顔をして私の前に跪いた。その行動に、騒がしかった控室が、急に静まり返る。

そんな中、閣下は私の手を取り、自分の手で優しく包み込んだ。私は何も言わず、先ほどと変わらない揺るぎない眼差しを向けた。

『ミュリエル、この結婚はオーレンドルフ公爵家とブラッドレイ侯爵家の間で結ばれた、とても重要な契約だ。わかるね？』

賢い君なら、これで伝わるだろう。閣下はそう言った。だから私はこう返した。

『不束者ですが、これからよろしくお願いいたします。お義父さま』

この日、私は姉様の婚約者と結婚した。

◇

今でも鮮明に覚えている。サイズの合わない純白のドレスに袖を通した時の喜びも、嬉しそうにヴェールを下ろす母の顔も、私を見上げる幼い弟の不安そうな顔も。それから、後悔と懺悔に揺れ

るジェフリー兄様の瞳も。

顔面蒼白の父に手を引かれ、困惑と同情と侮蔑の視線が交差するバージンロードを歩いたあの日から早五年。十七歳になった私は今日も変わらず、公爵夫人に小言を言われる日々を送っている。

「あの日、我がオーレンドルフ公爵家の名は深く傷つけられたわ」

「はい。申し訳ございません、お義母さま」

「ジェフリーだって、結婚目前で婚約者に逃げられて心に深い傷を負ったの」

「はい。申し訳ございません、お義母さま」

「おかげでジェフリーは今も部屋に引きこもりがちで……」

「ジェフリー兄様が引きこもっているのは、お部屋ではなく温室ですわ。お義母さま」

「だまらっしゃい！ どちらでもよいわ！」

植物学者でもいらっしゃる兄様が自室にいるか温室にいるかは大きな違いだと思っただけけれど、ここは神妙な顔で頷いておく。

「それは失礼いたしました、お義母さま」

「まったく、あなたって子は……いいですか、ミュリエル。あなたはブラッドレイ侯爵家の者として、責任を取るために嫁いできたのです。つまり、あなたがオーレンドルフの後継を産まねばならないのですよ？ 早くジェフリーをその気にさせなさい」

「申し訳ございません、お義母さま。私の魅力が足りないせいで孫の顔をお見せできません……」

「魅力が足りないなどということはないわ！ 卑屈にならないで、鬱陶しい！ もっと自信を持ちなさいな！」

「ありがとうございます、お義母さま。では自信を持って、本日も全身全霊で兄様を誘惑し、今夜こそ子作りに励みたいと思います」

こんな風に毎朝浴びせられるお義母さまのお小言を右から左へと聞き流しながら、私は今日も美味しいモーニングプレートに舌鼓を打つ。

うん。美味しい。流石は三代公爵家のひとつ、オーレンドルフ家。この家のシェフが作る料理はどれも絶品だ。一体、どれだけお金を積んで呼び寄せたのか、想像するだけで眩暈がする。特に今朝のメニユーは、私の大好きなふわふわオムレツ。中に入っているチーズの塩加減と卵の火の通り具合が絶妙だ。ああ、朝から幸せすぎる。

私はいつの間にか、目を閉じて意識を卵とチーズだらけの夢の国へと飛ばしていた。

「……ミュリエル」

お義母さまの低い声で一気に現実世界へと引き戻される。あと一步でオムレツの船に乗れそうだったのに。残念。

私が目を開けると、お義母さまは半眼でこちらを見ていた。

「ミュリエル。今、わたくしの話を聞いていなかったでしょう」

「滅相もございませんわ、お義母さま。私はただ、お義母さまの美しいお顔と美しい白銀のお髪に見惚れていただけです」

「嘘おつしやいな。目を閉じていたでしょう。わかっているのよ！」

「申し訳ございません。嘘をつきました。実はこのオムレツがとても美味しくて。もっと食べたいなあ、なんて思っていたらついトリップしてしまいました」

「んまあ!? この子ったら、なんて失礼な！ ちょっと、その貴女。今すぐにオムレツのおかわりを持つてきなさい！」

相変わらずのきつい口調で近くのメイドを呼びつけるお義母さま。しかしこの口調に慣れているメイドは、表情を変えずに一礼して食堂を出た。

「ありがとうございます、お義母さま。嬉しいです、オムレツ」

「ふんっ。わたくしの話を適当に聞き流されては困るからよ！ それよりミュリエル……」

「エリアーナ。もうミュリエルを責めるのはやめなかい……」

決壊した川のように流れ出るお義母さまのお小言を止めたのは公爵閣下だった。お義父さまは大きなため息をつきながら、自分のお皿から私のお皿に干し葡萄のマフィンを移し入れ、「ごめんな」と呟いた。優しい。そして公爵家のマフィンは本当に美味しい。幸せ。

「悪いのは逃げたヘレナであって、ミュリエルではないだろう」

「ミュリエルもブラッドレイ家の一員なのだから、あの女の罪はミュリエルの罪でもあるのです！」

「だから、ミュリエルはこうして責任を取ってこの家に嫁いでくれたのだろう」

「まだ責任は取れていませんわ。後継を産んでいないのだからー！」

「はあ……。最近の君はそればかりだな。確かに大事なことが、ミュリエルはまだ十七歳だ」

「わたくしは十六でコレットを産みましたが？」

コレット、というのはこの公爵家の第一子だ。ジェフリー兄様のお姉様で、今は他家に嫁がれている。

「時代が違いうだろう。こういうのは流れに任せるのが最近の主流だ。いい加減、嫁に息子を誘惑さ

せるのはやめなさい。みつともない」

「みつともないですって？ わたくしはミュリエルのために思つて！」

「え、私のため？」

マフィンを頼張つていた私はお義母さまの思わぬ言葉に、驚いてしまった。ふと横を見ると、お義母さまは澄ました顔でサラダを食べている。なんだ、聞き間違いか。

「エリアーナ。君が心配しているのは母上のことだろうか？ だが心配いらない。母上はもう歳だし、最近は何力も衰えて来たのか、首都の屋敷に籠りきりだ。昔のように小言を言う元氣もないよ」

「んまあ！ 嫁には随分とお優しいのですね、閣下。わたくしの時は我慢しろとしか言わなかったに。コレットを産んだあと、なかなか子宝に恵まれずに悩んでいたわたくしに寄り添うこともしなかったに！ わたくしがお義母様に、男児を産めない役立たずだと罵られていても、ずーっとずーっと見て見ぬ振りをしてきたくせに！」

「……それは、その……、すまな」

「謝れば許されるとでも？ 大体、閣下はご自分の母親のことを何もご存じないわ！ わたくしは今もお、会うたびに嫌味を言われているのですよ！ そんなお方がミュリエルに何もしないでほしいで！」

「い、いや……」

「一人でも子どもを産んでおけば、それだけで数年はおとなしくなるのです！ これは経験に基づく事実です。あなたは妻だけでなく嫁も自分の母親の餌食になさるおつもりですか！」

お義母さまの恨み節にタジタジになるお義父さま。この話題になると、お義父さまは途端に弱く

なる。私はその隙を見て、ご馳走様の挨拶をして席を立つた。

「待ちなさい、ミュリエル。どこへ行くの？」

「ジェフリー兄様のところです。オムレツのおかわりが来たので、どうせなら兄様と一緒に食べようかと」

「ふんっ。それは良い考えね。いいわ、行きなさい。あの子は放っておくと草しか食べないから」

「はい、お義母さま。では、失礼いたします」

お許しも出たので、私はこの五年で見違えるほどに上達したカーテシーを披露して食堂を出た。ちなみに、お義父さまも「では私も」と席を立つとしたが、お義母さまはそれを許さなかった。

流石お義母さま。強い。

食堂を出ると、すぐ横の庭園から仄かに甘い花の香りが漂ってきた。まだ空気はひんやりとしているのに、その香りには春の気配が混じっている。ふと目を向けると、枝先では黄色い花がほろび始め、まだ固い蕾と並んで風に揺れていた。

「王都に着く頃には、きつと見頃ね」

思わず独り言のように呟く。黄色いミモザの花言葉は、確か『秘密の恋』だったはず。私は昔からこの花が好きだ。あの鮮やかな黄色を見ると、胸の奥が少しだけ弾む気がする。

つい楽しくなってしまった私は、朝食を載せたワゴンを押しながら、鼻歌を口ずさんだ。

——ああ、なんて幸せなのだろう。

社交界では皆、私のことを姉の尻拭いをさせられた不幸な子どもだと決めつけているが、そんな

ことはない。むしろ、逆だ。私は今、誰よりも幸せだ。だって、本物のお姫様が住むような大きなお屋敷に住めて、毎日出来立ての美味しいご飯を食べられて、色とりどりの可愛いドレスが着られて。そして何より大好きな人と一緒にいられるのだから。

「ねえ、ジェフリー兄様？」

私は庭園を抜けた先にある温室の扉を開けてすぐ、中で土いじりをするジェフリー兄様に問いかけた。兄様は面倒くさそうに振り返ると、これまた面倒くさそうに口を開く。

『「ねえ？」だけ言われても何を聞かれているのかわからないぞ、ミュリエル」

当たり前前の反応だ。私は温室のテーブルに朝食を用意しながら、答えた。

「私が今、この国の誰よりも幸せだという話です」

「それは嘘だな。君はこの国で一番不幸な娘だ。五年前からずっと。国中を探しても君より不幸な子はいない」

「そんなことありませんよう」

「あるだろう。敬愛していた姉が急に失踪し、俺みたいな血筋と金以外に何の取り柄もない根暗男と結婚する羽目になり、心の準備をする時間もなく親元を離れることになったのに、新しい家では毎日のように姑に小言を言われて、最近では望んでもいない子作りをせかされ」

「当の夫は姑から守ってくれないどころか、可愛い幼妻に小指の先ほどの興味もなく、毎日毎日花や薬草のお世話で忙しそうにしているし？」

「……君が本当に困っているのなら助けるさ。でも別に困っていないだろう？」

「まあ、困ってはいませんが」

お義母^{かあ}さまは小言を言うだけでいびってはこない。ヘレナ姉様のしたことを考えれば、殴られたり、食事抜きや使用人を使つての嫌がらせなどがあつたりしても、文句は言えないくらいなのに。それどころか毎日美味しいご飯を食べさせてもらい、高度な教育とたくさんの宝石やドレスを与えてくれる。正直言つて、普通なら考えられないほどの好待遇だ。

「お義母^{かあ}さまはお優しいわ」

いつもツンツンとした態度で接してくるお義母^{かあ}さまの顔を思い出し、口元を緩めた。兄様はそんな私を見て、呆れた顔をする。

「君は変わっているな。あの母上が優しいなど」

「お優しいわ。少なくとも兄様よりは」

「なんだと？ 確かに愛想はないかもしれないが、母上より冷たいということはないだろう。プレゼントだって贈っている」

「モノを与えるだけが優しさではないのですよ、兄様。女心がまるでわからないのね」

「……うるさい」

「私はプレゼントより、もっと兄様に構っていただきたいのです」

「……俺は忙しい」

「まあ、ひどい。嫁いできた頃はいつも一緒にいてくれたのに。最近は本当に冷たいですね」

そう、兄様は私の年齢が上がるにつれて段々と距離をとるようになった。初めは私に姉様の面影を見ているのかとも思ったが、私と姉様は全く似ていないので多分違う。だって姉様は私とは違い、誰かが振り返る金髪碧眼の絶世の美女だもの。もし兄様に「私が姉様に似て来たから避けてらっ

しゃるの？」なんて聞いたら、鼻で笑われることだろう。

私は兄様に近づくと、しゃがんで目線を合わせ、彼の頬に自分の手を添えてこちらを向かせた。
「……なんだよ」

兄様の美しい紫水晶の瞳に私が映る。私はただで、心が躍る。けれど、この人の心は少しも揺れない。この人の心は今もまだ姉様のものだ。

「兄様」

「だからなんだよ」

「好きです。大好き」

「……」

「兄様が今もヘレナ姉様を忘れないのはわかってます。でも私は、兄様が世界で一番好き」

私は兄様の目を見て愛を囁いた。するとやっぱり兄様は眉を顰める。

「……君はよく、俺のことを一番に理解しているのは自分だと言うが、本当にそうだろうか」

「理解していますわ」

「嘘だね。君は俺を理解していない」

「いいえ。理解しています。そうね……、たとえばテーブルの上に並べられたモーニングプレートを見て思うのは、『俺、トマト嫌いなんだよな』でしょう？」

「……わかっているのなら持つてくるなよ」

「ダメですよ。食わず嫌いは」

その言葉にお行儀悪く舌打ちをした兄様は、私の手をそっと下ろすと、心底嫌そうな顔をして立

ち上がった。そしてひと通り周囲を片付けたあと、軍手を外して私の引いた椅子に座ってくれた。

私は彼の向かいに座り、彼が食べやすいようにオムレツを切り分ける。

「そこまでしなくてもいい」

「そう言われましても、お義母さまに言われているのですよ。兄様を誘惑しろって。だから、はい。あーん」

私は切り分けたオムレツをフォークに刺し、兄様の口元に運んだ。しかし兄様は口を固く閉ざし、それを拒否する。

「ほら、兄様。あーん、ですよ？」

「やめろ、恥ずかしい。それは別に誘惑でもなんでもないだろう」

「え？ もっと大人な誘惑をしてほしいということですか？」

「違うー！」

「隙あり！」

私は、動揺して大きく開けた兄様の口に無理やりオムレツを突っ込んだ。強制的に「あーん」をさせられた兄様は不服そうに眉を顰めるも、素直にオムレツを咀嚼した。

うん、可愛い。その不健康そうな色白の肌も、常に不機嫌そうに見える切長な目元も、お義母さまと同じ紫水晶の瞳も。それから、後ろで一つにまとめた艶やかな銀髪も。兄様は全てが可愛い。食べてしまいたいくらいに。

「……こら、ミュリエル。何を笑っている」

「あら？ 私、笑ってました？」

「ああ、笑っていた。俺にとつて、とても不愉快なことを考えているような顔だった」

「はて、なんのことでしょう？ 私はただ、兄様を食べたいなあと思っていただけですよ？」

「ほら、やっぱり不愉快なことじゃないか。年頃の女が男を『食べたい』なんて言うんじゃない。勘違いされるぞ」

「あ、食べたいというのは本当は食するわけではなく、性的な意味での『食べたい』ですよ？ 私は人喰い狼ではないので」

「わかってるから、わざわざ説明しなくていい！」

兄様はまたはしたなく舌を鳴らした。性的な意味で、という言葉に反応したのだろうか。だとしたら、もう二十三だというのに初心な男だ。

姉様はどうしてこの人を選ばなかったのだろう。顔は……、まあ普通だが、金も地位もある。誰にでも優しいわけではないが、気を許した相手にはとことん優しく、何より一途。もし、あのまま何事もなく結婚していたら、兄様は間違いなく姉様を幸せにしてくれたはずだ。

「……なんだよ。ジロジロ見るな」

「好きですよ、兄様」

私は嫌そうにこちらを見る兄様に投げキッスを送った。さらりと避けられたが、こういうお遊びに乗っかってくれるようになっただけでも進歩だ。

「ふふっ。好き。大好きです」

「……そうやって好き好き言うのはやめてくれ」

「やめません。兄様はいつになったら私のこの気持ちを受け止めてくださるの？」

「受け止めるも何も、君のソレは本気じゃないだろう」

「ひどい。私はいつでも本気なのに」

「嘘つき。どこがだよ」

兄様は苛立った様子で、私からフォークを取り上げて自分でオムレツを食べ始めた。私はムツと頬を膨らませる。

「……もう。兄様ったら、相愛わず酷いんだから」

この五年間。雨の日も風の日も雪の日も、高熱を出した日も頭が痛い日も心が荒む日も、毎日欠かさずに愛を伝えているのに、兄様は一向に私の気持ちを信じてくれない。好きだと言われているにもかかわらず、好意そのものをなかったことにするなんて、きつと普通の女の子ならもう心が折れているだろう。

まあ、私は今さらそんなことでは傷つかないけれど……

「兄様はもう少し素直になったほうがよろしいわ」

姉様の裏切りのせいで他人が信用できないのはわかるが、向けられる好意をずっと否定し続けていても良いことはない。これではこの先、誰かと幸せになるなんて不可能だ。兄様にはもう姉様のことなんて忘れて幸せになってほしいのに。兄様の心には今も姉様が住みついている。

「兄様を一番に思っているのは私です。ヘレナ姉様じゃないわ」

「……」

「だからもう、姉様を忘れて。どうか私を見てください」

私の切実なお願いに、兄様は眉間に皺を寄せて、重たく息を吐いた。

「ため息はひどいです」

「ひどいのは君の方だ。君は本当に何もわかっていない」

「どういう意味ですか？」

「俺が素直になると後悔するのは君の方だということだよ」

「意味がわかりません」

「なら、わかるまで考えるんだな。ごちそうさまでした」

兄様は意味深な言葉を吐いて席を立ち、食べ終わった皿を片付け始める。気になる言い方をしておいて続きを話さないのはずるい。あと、シレッとトマトを残したまま食事を終えようとするのもずるい。

だから私は立ち上がり、兄様の首元へと手を伸ばすと、そのまま強引に彼を自分の方へと引き寄せた。そしてお皿に残されたトマトを摘み、驚きのあまりに開いてしまった兄様の口にトマトを押し込んだ。兄様は口に含んだトマトを嫌そうに咀嚼する。

「強引なやつめ」

「だって、食わず嫌いは良くありませんもの。食べてみたら好きになるかもしれないし」

そう、もしかしたら好きになるかもしれない。トマトのことも、私のことも。

「……ねえ、兄様。トマトは美味しいですか？」

なんてことない、食べた感想を聞いただけ。それなのに、何故こんなにも緊張してしまうのか。この質問の裏側に隠された私の複雑な乙女心に、鈍い兄様が気づくはずもないのに。一人で勝手にドキドキして、バカみたいだ。

内心が悟られないよう、心とは裏腹の穏やかな表情で待つ私を見て、兄様はしばらく黙り込み、蚊の鳴くような小さな声でポツリと呟いた。

「……嫌いじゃない」

そっけなく返された返事が思っていたものと違い、私はちよつとだけ動揺した。

美味しいかと聞かれて、嫌いじゃないと答えるのは別におかしなことではない。だから確信はない。トマトのことを言っただけかもしれない。けれど、もしこの嫌いじゃないが私への言葉だったらと思うと、嬉しくてたまらない。

「大好きよ、兄様……」

私は心の声が漏れていることにも気づかず、火照る顔を両手で覆い隠した。だからこの時、兄様がどんな顔をして私を見ていたのかを、私は知らない。

その日の夜。私は新しいナイトドレスを確認してもらうためにお義母^{かあ}さまの部屋を訪れた。

襟ぐりの大きく開いた、胸を強調するようなデザインのナイトドレス。少し品がないような気もするが、長い丈と透けない淡い水色の生地。それから裾のあたりにちりばめられたブルースターの花の刺繍が可愛らしさを演出し、いい塩梅に見せてくれている。

「いかがでしょうか？ お義母^{かあ}さま」

私はお義母^{かあ}さまにプレゼントされたお気に入りの一着を自慢するように、彼女の前でくると回ってみせた。すると、お義母^{かあ}さまは何かに撃たれたような声を漏らし、苦しそうに胸を押さえた。「お義母^{かあ}さま！ 大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫よ。予想を遥かに上回るほどの暴力的な可愛さだったからつい……」

「え、可愛い？」

「誰もそんなことは言っていないわ。勝手に勘違いしないでちょうだい」

「すみません、調子に乘りました」

確かに「可愛い」と聞こえた気がするけれど、お義母さまが言うならそうなのだろう。

「それより、今夜はその格好で挑むのね」

「はい、そうです。これなら兄様を虜にできるかと思ひまして」

「……そうね、間違いないわ。けれど、そんな格好で廊下をウロウロするのはやめなさい。流石にまだ寒いでしょうし……、誰かに見られたら困るわ」

「そうですね。とりあえず、とっても寒いです」

「ほらね。私のガウンを貸してあげるから今すぐにそれを着て」

お義母さまは侍女のルイーゼの方を見て顎をクイッとあげた。ルイーゼはそれだけでお義母さまの要求を察して、近くの椅子にかけてあったガウンを私の肩にかけてくれた。皆まで言わずとも主人の要求を察して動けるあたり、流石はオーレンドルフ家の使用人だ。

「これ、お借りしてもいいのですか？」

「ええ、構いません」

「わあい、ありがとうございます」

私は肌触りが最高なガウンの袖を鼻に近づけ、匂いを嗅いだ。お義母さまが好む、爽やかなベルガモットの香りがする。

「ふふっ、お義母さまの匂いがします。いい匂いだあ」

私が心地の良い香りを堪能していると、お義母さまがまた苦しそうな声をあげて胸を押さえた。心臓を患^{もう}つていらつしやるわけでもないのに、どうしたのだろう。心配だ。

「お義母さま、大丈夫ですか？」

お義母さまの顔を覗き込むと、丸めていた背筋をスッと伸ばして、何事もなかったかのような顔をされた。

「あなたごときに心配をされるようなわたくしではないわ。それよりも、ミュリエル。そのガウンを脱ぐのは必ずジェフリーの部屋で、ジェフリーと二人きりになってからよ」

「はい、心得ております」

「脱ぐ時はできるだけ焦らして脱ぐのです。決していつもの着替えの時のように豪快に脱いではいけません。いいですね？」

「はい。わかりました！」

「良いお返事ね。本当に理解しているかはわからないけれど、まあいいわ。……ルイーゼ、ちょっと心配だからミュリエルをジェフリーの部屋まで送ってちょうだい」

「かしこまりました、奥様」

「ではミュリエル、行つてらっしゃい」

「はいっ！ 行つてきます！」

私は出征前の兵士のように、背筋をピンと伸ばしてお義母さまに敬礼をすると、踵を返して部屋を出た。薄暗い廊下の先、一番端の日当たりの良い部屋が兄様の部屋だ。

これまで、幾度となく夜這いを仕掛けてきたが一度たりとも成功したことはない。兄様はいつも部屋に入って来た私の首根っこを掴み、容赦なく部屋の外に放り出す。それもお色気たっぷりのナイトドレスに身を包んだ私を見て、憐れむような目で息をつきながら、だ。

「……私、大丈夫よね？」

不安になった私はくりと後ろを振り返り、付き添ってくれたルイーゼに尋ねた。すると、彼女は表情を変えることなく、問題ないと言ってくれた。

「さあ、頂きましたよお嬢様。ご健闘をお祈り申し上げます」

ルイーゼは形式的に私の健闘を祈ると、兄様の部屋の扉を軽くノックした。中から兄様の返事が聞こえる。私の胸の鼓動は一気に速くなった。

「ミュリエルお嬢様をお連れしました。……さあ、どうぞ。お嬢様」

「ありがとう、ルイーゼ。もう下がっていいわ」

「はい。失礼いたします」

ルイーゼは軽く頭を下げ、すぐにその場を辞した。パタンと背後の扉が閉まる。兄様は読んでいた本を机に置き、後ろを振り返った。そしていつものように心底嫌そうに目を細めた。

「兄様、ご機嫌よう」

「ご機嫌は非常によろしくない。主に君のせいだ」

「あら、それは大変ですわ」

「はあ……。君も懲りないな、ミュリエル」

「諦めが悪いのは私の長所ですので」

「悪いが、何度来られても俺が君を抱くことはない。絶対にだ」

「世の中、絶対なんてあり得ないのですよ」

絶対にあり得ないと思っていることでも、案外普通に起きたりする。そう、例えば結婚式当日に婚約者に逃げられるとか。……なんて、言えないけど。

会話がぶつんと途切れて、気まずい沈黙が流れる。兄様と私はなんとなく見つめ合う。静かな部屋で、暖炉の薪がパチツと自己主張した。橙色の炎がゆらゆら揺れて、空気だけは妙にドラマチックだ。

「……よし！」

私は大きく息を吸い込み、腰紐をすりと解く。そして勢いよくガウンを脱ぎ、期待を込めて兄様を見つめた。けれど兄様は、呆れたように眉を顰めるだけだった。

「あれえ？」

おかしい。完璧だと思ったのに。

「痴女かよ。馬鹿」

チツと舌打ちし、椅子から立ち上がる兄様。ゆっくりと歩み寄ってきて、床のガウンを拾い上げると、そのまま乱暴に私の頭に被せた。扱いが、雑すぎる。

「あ、そういうことですか」

どうやら豪快に脱いだのが気に入らなかったらしい。そういえばお義母さまも、ゆっくりと焦らしながら脱ぐよう仰っていた。私は再びガウンを羽織ると、今度はちらちらと上目遣いで兄様の様子を窺いつつ、右肩に手を添えてできるだけゆっくりとガウンをずらした。

けれど、どうしてだろう。自分でもわかるほどに動きがぎこちない。おかしい。お義母^{かあ}さまの指示通りにしているつもりなのに。おかしい。しかも心なしか、兄様が笑いを堪えるみたいに肩を震わせている気がする。おかしい。

「ああ、もう！」

私は何が正しいのかわからず、ヤケになって再び豪快にガウンを脱ぎ落とした。兄様は耐えられなかったのか盛大に吹き出した。私は頬を膨らませる。

「兄様。それは流石に失礼なのではなくて？」

「悪い。でも君の色仕掛けがあまりにもぎこちなくて」

「こういうのは慣れていないのです！ 仕方がないでしょう!？」

「そうだな。慣れないことをするものではないな、ミュリエル？」

「……むう。そうですわね！」

「そう怒るな。ほら、とりあえずガウンを着なさい。腹を冷やすぞ」

兄様は拗ねた子どもをあやすように私の頭を撫で、そしてまた、私にガウンをかけてくれた。今度は頭ではなく、肩に。

姉様に遠慮してか、ここ最近滅多に触れてこなくなっていたのに。私は肩の上に乗せられた兄様の手を掴んだ。

「……おい、こら」

「あ、ママができてる」

「あまり触るな。痛い」

「どうしてママなんてできてるのですか？ 引きこもりのくせに」

「引きこもりって言うな。もう離してくれ」

「んー、もう少し。兄様の手、好きなんですよね。私」

花の匂いがする、優しくて温かい手。私は昔からこの手が大好きだ。

「そういえば昔はよく、私の手を引いて歩いてくれましたよね。お散歩に行く時とか」

「……忘れた」

「本当に？ 私、鈍臭いから何にもないところでよく転んで。あまりに危なっかしいからって、手を繋いでくれていたでしょう？」

「……さあ？ そうだったか？」

「私、あの頃からずっと、兄様のこの手が大好きなんです」

兄様は、姉様とのデートに必ずと言っていいほど現れる私を邪魔者扱いせずに、しっかりと手を繋いでくれていた。本当は姉様との二人きりが良かったはずなのに、いつも私のことを気にかけてくれた。優しい人。

「……ごめんなさい」

姉様がミュリエルもおいでと誘ってくれたから喜んでついていったけれど、私がいなければ、兄様はもつと姉様との仲を深められたのではないだろうか。姉様も兄様の魅力に気づくことができ、結果的に兄様を裏切るようなことはしなかったのではないだろうか。今はそう思えてならない。

「……はあ」

私の身勝手な懺悔に、兄様は静かに息を吐き、私を見下ろした。

「何に對しての謝罪かはわからないが、謝るな」
「ご、ごめ……」

「だから謝るな。君の謝罪の九割は君が悪いわけじゃないことに対してのものだ。そんなことで謝られても、俺は困る」

「はい……。ごめ……。あ、いや……。はい。気をつけます」

「……うん」

シンとした気まずい空気が流れる。ダメだ。今夜は完全に空回りだ。雰囲気も何もあつたものじゃない。私はそつと一步、後ろに下がった。

しかしその瞬間、足元に柔らかい引っかかりを感じた。それがガウンの裾だと気づいた時には、もう遅かった。身体がふわりと傾き、視界が揺れる。

「ミュリエル!？」

倒れかけた私に、兄様の腕がすばやく伸びる。そしてそのまま、胸元に引き寄せられた。

「あ、ありがとうございます」

「つたく。気をつけろ、馬鹿」

「す、すみません。……って、あれ?」

意図せず、兄様の胸の中に飛び込むことになってしまった私は、兄様の胸板が想像していたよりもずつと分厚いことに驚いた。

「もしかして……。鍛えていらつしやるの?」

兄様の隆起した筋肉を触りながら尋ねる。心臓の鼓動が妙に速い。

「兄様?」

「……まあ、そうだな。少しだけ、鍛えている」

「手のひらのマメもそのせい……? まさか、劍の鍛錬をしていらつしやるの? 劍は苦手だっておつしやっていたのに」

「だって、君が……」

「私が?」

「……いや、何でもない」

どこか奥歯に物が挟まったような話し方をする兄様に、私は首を傾げた。兄様はそんな私を見て、グッと眉根を寄せる。とても不快そうな顔だ。最近の兄様はよくこんな顔をする。それは私のことを妻と認めていないからなのかもしれないが、毎回そんな顔をされては流石に傷つく。

「兄様……。好き。大好き」

私は兄様に抱きついたまま、兄様を見上げて呟いた。すると、兄様の眉間の皺はさらに深くなった。何故だ。

「はああああああ……」

「兄様、ため息が大きすぎます。ひどいです。傷つきました」

「小さければいいのか?」

「そういうことを言っているではありません。乙女に向かってため息を吐くなど申し上げているのです」

「仕方がないだろう。君が本当に何一つ理解していないのだから。ため息くらい吐きたくもな

るさ」

「兄様はよく、私は何もわかっていないとおっしゃいますけど、一体何をわかっていないと言うのです？」

「全部だよ」

「きゃっ!？」

兄様は苛立ったように、少し乱暴に私の腰を抱き寄せた。

「に、兄様？」

「ミュリエル」

「な、ななな何でしょう？」

「このまま、ベッドに行くか？」

「……え？」

絶対にないと言っていたのに、どうして？

予想外の提案に私の体は凍りついたように固まる。ソレが目的で来ているのに、いざそういう展開になると急に動けなくなるなんて情けない。

「あ、あああああ……」

「ミュリエル……」

兄様は私の顔に手を添えると、頬を優しく撫でる。そして動揺する私を弄ぶように唇に触れると、親指の腹で少し強くなぞった。これはもうキスされる流れだ。だって、昔読んだ恋愛小説でも同じような場面があったもの。たしか、あれは護衛の騎士が片想い相手のお姫様にちよつと強引に迫る

シーンだったはず。

どうしよう。私もあんな風に触られるのだろうか。そう思うと少し怖くなってきた。だが、怖いなんて言っていられない。これはまたとないチャンスだ。私は覚悟を決めてギョツと目を閉じた。けれど、兄様はそれ以上何もしてこなかった。私がゆつくりと目を開けると、目の前には優しさと諦めが混ざった、静かな表情を浮かべる彼の顔があった。

「兄、様……？」

「冗談だよ。本気にするな」

「……そ、そっか。そうですね。兄様が私なんかの誘惑に乗るはずないですもんね。ははは……」随分とタチの悪い冗談だが、妙にホッとしてしまった私は怒る気にもなれなかった。

「部屋まで送ろう。子どもはもう寝る時間だ。早く寝ないとまた昼間に眠くなるぞ」

兄様は私の頭を撫で、私の手を引いて廊下へと誘う。いつまで経っても子ども扱いだ。

「子ども扱いはやめてください」

「そんなこと言われても、ミュリエルはまだ子どもだよ。だって、よく図書室で昼寝をしているだろう？ 昼寝するのはお子様の証拠だ」

「偏見がすぎますわ。お部屋が暖かいと大人でもお昼寝したくなります」

「違うな。君が子どものくせに夜更かししてるせいだ。だからもうこういうことはやめて、明日からは早く寝なさい」

聞き分けの悪い幼子に言い聞かせるような口調で私を諭す兄様。それがとても不愉快で、私は口を尖らせた。

「ねえ、兄様。私はいつになったら兄様の妻だと認めてもらえるの？」

自分でもびつくりするくらい、子どもじみた拗ねた口調だった。子ども扱いすると言った手前、恥ずかしくなり顔を伏せる。

すると、兄様はフツと笑みをこぼした。そしてまた、しょんぼりとする私の頭を撫でた。これ以上ない子ども扱いが悔しくて、私はその手を払いのけた。

「子ども扱いは嫌だつてば！ 私はもう立派なレディです！」

「立派なレディは安易に男を誘惑したりしないんだよ」

「私と兄様は夫婦だもの」

「覚悟もないくせに、よく言うよ」

「……覚悟？」

「わからないのならいい。ほら、行こう。部屋まで送るから」

廊下に出た兄様はランタンの灯りを頼りに、私の前を歩く。先ほどの言葉の意味を聞きたいのに、兄様の背中がそれ以上聞くなと言っているような気がして、私は何も言えなかった。

覚悟とは何のことだろう。姉様のことを忘れられない兄様を愛し続ける覚悟？ それとも周りからの中傷に耐える覚悟？ そんな覚悟かはわからないけれど、姉様の前で誓いを立てた瞬間から、この結婚生活が目も当てられないほど悲惨なものになろうとも兄様と添い遂げる覚悟はできている。それなのに、私にこれ以上、どんな覚悟を見せろと言うのか。

「はあ……」

兄様の背中を追うのに少し疲れた私は窓の外を見る。夜の帳が下りた庭園には明かりがなく、何

も見えない。今夜は月も出ていないから本当に真っ暗だ。

このまま、朝が来なければ庭園の花々はどうなるんだろう。ふとそんなことを考えた。何の意味もない疑問だ。必ず朝は来るし、朝が来たら陽は昇る。でももし、朝が来ない世界になったなら、この花たちは希望も何もない暗闇の中で緩やかに枯れていくのだろうか。

「おやすみ」

「おやすみなさい、兄様」

部屋にたどり着いた私は兄様の姿が見えなくなってから、扉を閉めた。しんと静まり返る室内の静寂が急に怖くなる。

「早く寝てしまおう」

こういう時はいつも余計なことを考えてしまう。だから私はさっさと眠ってしまおうと、お義母さまに借りたガウンを脱ぎ、ドレッサーの椅子にかけた。そしてベッドに向かおうとしたその時、コンコンと、小さな音が部屋の静けさを破った。返事をする、扉がゆつくりと開き、ルイーゼが顔を半分だけ覗かせた。

「……ル、ルイーゼ。こんな時間にどうしたの？」

「夜分遅くに申し訳ございません。実は至急お渡ししたいものがありまして」

ルイーゼはそう言う、一通の手紙を差し出した。血のように赤く美しい薔薇の絵が描かれた封筒に、私は一瞬で差出人の顔を思い浮かべた。

「……。わざわざ、ありがとう」

「いえ。では、失礼致します」

「ええ、おやすみなさい」

ルイーゼは軽く頭を下げ、部屋を後にした。私はテーブルの引き出しにしまってたペーパーナイフで封を切ると、手紙を持ったままベッドに潜り込む。そして暗闇の中、それを読んだ。

その日、私は久しぶりに悪夢を見た。

それからしばらくして、私と兄様はオーレンドルフの分家で開かれた誕生会に公爵夫妻の名代として出席した。私は久しぶりに見た兄様の正装に見惚れつつ、彼の従妹であるバートン侯爵家のシルヴィアに話しかけた。

「兄様って、ちゃんとしているとそこそこかっこいいわよね」

「……」

「私ね、やっぱり兄様には姉様のことなんて忘れて幸せになってほしいの」

壁の花に徹していたシルヴィアは扇で口元を隠しながら、舌を鳴らす。令嬢として、舌打ちは流石にはしたくないと思う。

「ちよつとミュリエル。話しかけないでくださる？」

「どうしてそんな酷いことを言うのよ。私たち友達でしょう？」

「違いますわ、顔見知りです。夜会では話しかけないでと前にも言いましたでしょう？」

「壁の花に徹していたいから？」

「そうよ。わかっているのなら近寄らないでくださるかしら。あなたが近くにいると目立って困りますの」

恥ずかしがり屋なシルヴィアがキッと私を睨む。そんなに怒らなくてもいいのに。私は口を尖らせた。

「言うほど目立ってないと思うけれど」

「周りを見てごらんさないな」

シルヴィアは顎をクイッとあげて、辺りを見渡すよう促す。私は言われるがままに周囲を確認した。

「……うん！ なんだかとても見られているわね！」

私たちの周りだけクレーターができている。同年代の男性たちが、チラチラとコチラを見ては目を逸らすを繰り返している。

「ふむふむ。うーん……」

これは何というか、不思議な感覚だ。私は腕を組み、考えた。

正直、好奇の視線なら慣れっこなのだが、今日のこれは少し違う。初めましての人が多くからだろうか。この視線はどちらかというと好意の視線のような気がする。私は隣に立つシルヴィアとの距離を縮めると、彼女の耳元で囁いた。

「ねえねえ、シルヴィア」

「何よ」

「シルヴィアってモテるのね」

「いや、あたしじゃねーよ!？」

思わず言葉が崩れるシルヴィア。そんなに変なことを言っただろうか。私が首を傾げると、シル

ヴィアは何故か大きなため息を吐いた。

「全部アンタに対するものよ。なんでわからないの……」

「そんなことないわ。好奇の視線なら話は別だけれど。首都の夜会ではいつもヒソヒソと内緒話をされているし」

「そりゃ、首都でアンタに声をかける勇氣のある男なんていないわよ。みんな、身の程をわきまえているからね。それに首都には聖教区もあるし。そんな場所では誰も神の教えに背こうなんて思わないの」

神の教え。国教であるバーティミア聖教では、既婚者への誘惑なんて、禁忌中の禁忌。

それでも、地方の夜会では空気がちよつと違うらしい。

「いいこと、ミュリエル。こういう、地方のちよつと軽めの夜会では気持ちも緩くなるの。アンタはわかりやすい美人ではないけれど、愛嬌のある顔立ちをしているし、その光の当たる角度で色が変わって見える髪は特別感があつて羨ましいし、海色の瞳は不思議だけど綺麗だし……」

「そんな褒めても何もでないわよ？」

「褒めてない！ と・に・か・くつ！ 普通の美的感覚を持っていれば、ちよつかいをかけたくない程度には可愛いもの！ それを自覚しなさい！」

「あ、ありがとう……？」

「だから褒めてないってば！」

「ええ……」

どう聞いても褒められているようにしか思えないのだが。これを褒め言葉と捉えるのは私が自意

識過剰なのだろうか。

「でも私、人妻よ？」

「人妻でも関係ないでしょ。こういうのは。特にアンタたちはいつ離婚するかわからないもの。今のうちに仲良くなっておけば、アンタが捨てられた時にチャンスが回ってくるかもしれないでしょう？」

「なんてことを言うのよ。離婚しないわ」

「どうだか」

「酷い。友達なら応援してよ。私のこの不毛な片思いを」

「友達じゃない！ 顔見知りよ！」

「はいはい。というか、私のことを評価してくれるのはありがたいけど、私よりシルヴィアの方が断然いい子だし可愛いわよ。ほら」

私はシルヴィアの伊達メガネをヒョイツと取り上げると、自分の頭についていた花飾りを一つ取り外して彼女の髪につけた。艶やかな長い黒髪と白いデイジーの花飾りはとても相性が良く、私は満足げに頷いた。

「うん。やつぱり可愛い。シルヴィアはもつと自信を持ったほうがいいわ」

私が毛先に口付けて悪戯っぽく口元を緩めると、シルヴィアは何故か顔を真っ赤にして「うるさい」と怒ってしまった。褒めただけに、解せない。

「……ねえ、ミュリエル。ひとつ、聞きたいことがあるんだけど」

「ん？ 何？」

「アンタ夜中に……、あ、やばい」
「え？」

どうしたの、と聞くより先に、シルヴィアに嫌そうな声をあげさせた元凶が会話に割り込んでくる。

「だーれだ？」

「きゃっ!？」

突然背後から手で目元を覆われて視界を遮られた私は思わず声を上げた。見えないはずなのに、目の前にいるシルヴィアがものすごく嫌そうな顔をしているのが何となくわかってしまう。私は面倒くさいと思っていることを悟られないように、できるだけ声のトーンを落とさずに背後の人物に尋ねた。

「オズウェル殿下、ですか？」

「大正解」

私の目元から手を退けた第二王子オズウェル殿下は、私の正面に回り込み、とても愉快そうに口角を上げた。

その顔立ちは、誇張でもお世辞でもなく、この国の同年代の中で群を抜いて美しいと思う。私が初めてお会いした時は、兄様と並んでいることが多かったから、余計にそう感じたのかもしれない。兄様は私にとって特別な存在だけれど、見目が良くて当たり前前の貴族社会の中で取り立てて美形というわけではないので。

けれど、それだけだ。おもねることが大得意な貴族たちがオズウェル殿下を褒める時に外見の話

しかしただで、社交界での評価は知れる。

「久しぶりだな、ミュリエル」

「お久しぶりです、殿下。まさかいらつしやるとは思いませんでしたわ」

「本当は来るつもりなんてなかったんだけど、君たちが参加するという噂を聞いたからな」

「それは……、まあ……、うふふ」

私たち夫婦のためにこんな小さな夜会に足を運んだのだとても言いたいのだろうか。恩着せがましい。私は笑顔が引き攣っていないか心配になった。

「ミュリエル。良ければ一曲、どうだろう？」

「申し訳ありません、殿下。実は先ほど足を痛めてしまいました」

「ああ、先ほどのジェフリーとのダンスの時だな。踏まれたのか？ 可哀想に」

「いいえ。会場の隅の段差で挫いただけですわ。私ったら昔から鈍臭くて」

「嘘をつかなくてもいい。彼は昔からダンスが下手だからなあ」

殿下は遠くにいる兄様の姿を見て、小さく鼻を鳴らす。どうやらこの男には私の声が届かないらしい。流星は顔の良さ以外に何の取り柄もない愚王子だ。踏まれたなんてひと言も言っていないぞ、こら。

「どうだ？ オーレンドルフでいじめられていないか？」

「とんでもございせんわ、殿下。お義母さまもお義父さまとても良くしてくださいます」

「ジェフリーは？ 君には優しくしてくれないのか？」

「もちろん優しくしてくださいます。ご心配には及びませんわ」

「でも、ジェフリーはいつも君に冷たいじゃないか。君がどれだけ好意を見せようとも彼は気にも留めない」

知ってか知らずか、一言言われたくないことを的確につかないでほしい。

「に、兄様は照れ屋さんなのですよ」

「私はそうは思えないけど。ヘレナと婚約していた時はもっとわかりやすく愛情表現をしていたぞ？ 学園でも夜会でも」

「あははは……、そうだったのですね」

「愛のない結婚は辛いだろう、ミュリエル。私で良ければいつでも話を聞くから遠慮なく相談してくれ」

「ご心配いただき、ありがとうございます……」

「まったく、ジェフリーも何を考えているんだか。ヘレナに逃げられたからといって、まさか妹の方を娶るなんてな。節操がないと言うか、何と言うか……。ねえ？」

殿下は小馬鹿にしたように肩をすくめた。なんとも腹の立つ仕草だ。

「ヘレナもあんな根暗男と一生添い遂げるなんて耐えられなかったんだろ？ 結婚式当日に逃げ出すなんて最低だが、それでも私は彼女に同情してしまうよ」

「……」

「学園時代、ヘレナとジェフリーはよく揶揄^{からか}われていたんだ。当たり前だよな。人気者の彼女と根暗な彼ではどう見ても不釣り合いだ。王命とはいえ、剣もまともに振るえない、勉強しかできないような頼りない男と結婚しなければならいなんて、そりゃあ逃げたくなるだろう」

殿下はそう言つて、喉の奥から響くような、品のない高笑いを響かせた。私も感情を一切見せず、絹のように滑らかな笑みを浮かべ、口を開く。

だが、それまで黙っているだけだったシルヴィアがすかさず私の口を塞いだ。

「ちよつと！ 王子に何を言うつもりよ！」

小声で、けれどはつきりと私を叱責するシルヴィア。何を言うつもりかと言われれば、そうだな。

『黙りやがれ、クソ野郎。埋めるぞ』だろうか。

……うん。危なかった。私はシルヴィアの気遣いに心から感謝した。

「ごめん。助かった」

「まったく、アンタって子は！ 今度ロアナのチーズケーキご馳走なさい」

「ええ……、わかったわよう」

失言を防いだお礼が王室御用達の最高級ケーキとは少し割高な気がするが仕方がない。今後の予定を思い浮かべ、シルヴィアをいつ招こうか考える。

シルヴィアはそんな私の背後に回り込むと、スツと後ろのリボンを解いた。

「あら、ミュリエル。リボンが解けているわ。直してあげるから、部屋に行きましょう」

「ありがとう、シルヴィア。殿下、申し訳ありませんが失礼致します」

シルヴィアのナイスな判断に助けられ、私は殿下に一礼した。

けれど、この見た目しか取り柄のない王子は、私たちの予想の斜め上をいく発言をした。

「では私も一緒にこう」

「……はい？」

まさか同行しようとするとは思わなかった。私もシルヴィアも目を丸くした。

「私が直してやろう」

「殿下。ミュリエルは人妻です。夫以外の異性と客室に行くのは流石に……。要らぬ誤解を招きま
すし、何より神の教えに反します」

「バートン嬢は黙っていてくれないか。私はミュリエルと話している」

殿下に睨まれたシルヴィアは、内心をおくびにも出さず深々と頭を下げて私の後ろに下がる。こ
んな時だが第三者がいる時の彼女の淑女としての振る舞いは完璧だ、見習いたい。

私は申し訳なさそうにするシルヴィアに兄様を連れてくるよう伝え、この場から離れてもらった。
「申し訳ございません、殿下。ですがやはりバートン嬢の言う通り、夫以外の殿方と別室に移動す
ることはできませんわ」

「遠慮しなくてもいい」

「いえ、遠慮しているわけではなくて……」

「私と君は友人だろう？ 君が敬虔なバーティミア聖教の信者であることは知っているが、今は昔
よりも男女の交流が寛容になっている。私と君と一緒に消えたからといってその関係を邪推する奴
はいないさ」

寛容になっているのは未婚の男女に限るし、そもそも私とお前は友達じゃない。ギリギリ知り合
いと呼べる程度の赤の他人だ。そう言いたいのをぐっと堪えて、言葉を選ぶ。

「家名に傷をつけてしまいかねない噂を立てることは避けたいのです。どうかお許しください
ませ」

「ふむ。君も真面目だな。なぜ罪のない君に責任を求め、君を縛り付けるオーレンドルフに義理立
てする必要がある？」

「縛り付けられてなどおりませんわ。私はいつも自由にさせていただいています」

「しかし、学園にも通えていないのだろう？」

「貴族学園は未婚の男女が通う学園です。私に入学資格はありませんわ。姉のヘレナも花嫁修行の
ため卒業を待たずに辞めました」

そう、成績優秀で学園の人気者だった姉様さえ、辞めたのだ。私を不自由だというのなら、姉様
だって自由ではなかった。

「頑なだね、君も。しかし社交は大事だよ？」

「社交は適度にしております」

「私が言っているのは同年代の貴族との関わりのことだ。君が行く社交場は全部、公爵夫人が行く
場所だろう？ ああ、可哀想に！ 自由に友達も作れないなんて！ うら若き乙女が青春を謳歌し
ないでどうする！」

殿下は出てもない涙を拭うフリをして、私を憐れんだ。

どうして皆して、私を惨めな女にしたがるのだろう。堂々と兄様を好きだと言うことができ、
兄様のエスコートで夜会に行けて、兄様とお揃いのデザインのドレスが着れることがどれだけ幸せ
なことが、何故わからないのだろう。

——なんかもう、うるさいな

限界を迎えた私は大きく息を吸った。けれど、その時だった。

突然、後ろから抱きすくめられた。嗅ぎ慣れたシダーウツドの香りがする。兄様だ。私は喉元まで出かかっていた、『黙りやがれ、顔面以外に何の取り柄もない出廻らしクソ王子が』という暴言をこくりと飲み込んだ。

「何をしているんだ？ ミュリエル」

耳元で兄様が低く囁く。この不意打ちの攻撃になす術がない私は、全身の血が沸騰しているみたいに体が熱くなった。

「な、何も……。殿下とお話ししてただけですわ」

「へえ。何か、部屋に行くとか聞こえたけど」

「あ、そ、それは……」

「オズウェル殿下。私の妻を気安く誘わないでいただけますか？」

「っ、つま……」

妻、だなんて。兄様の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかった私は、反射的に俯いてしまった。兄様は単に事実として妻と言っただけなのに、たったそれだけのことがどうしようもなく嬉しい。

「フツ。どうやら、ミュリエルは君に妻と呼ばれるのが不服なようだぞ？ ジェフリー」

何をどう勘違いしたらそう思えるのか、殿下は鼻先で笑って、兄様を小馬鹿にする。私は怪訝な顔で殿下を見上げた。すると何故か、私と目が合った彼は得意げにウインクをした。気持ち悪い。

「なあ、ジェフリー。いい加減ミュリエルを解放してやったらどうだ？ このままでは彼女が可哀想だ」

「は？ 何言って……、むぐっ!？」

言い返そうとした私の口を兄様の大きな手が覆う。黙ってろ、と耳元で囁かれた私はまた俯いた。私が話せないのいいことに、殿下……いや、クソ王子は聞くに耐えない話を続ける。

「君たちオーレンドルフ家が姉の代わりにと妹を欲しなければ、この子は今頃、誰かに恋をして甘酸っぱい青春を謳歌していたかもしれないのに。本当に可哀想に。なあ、ミュリエル？ 君も多くの友人に囲まれて楽しい青春を謳歌したいだろう？」

まるで自分の言っていることは全て正しいみたいだな、そんな態度が鼻につく。何も知らないくせに。

もう本当にやめてほしい。今日は兄様の妻として堂々と兄様の隣に並ぶことのできる数少ない機会だったのに。全部台無しだ。

「だいたい、恥ずかしいとは思わないのか？ 姉の代わりに妹を欲しがってるなんて。節操がないとは……」

「——オズウェル殿下。そんなところで何をしてるんですか？」

私が再度我慢の限界を迎えそうになっていったその時。どこからともなく現れた赤髪の騎士がクソ王子の戯言を止めた。おそらく王子の護衛なのだろう。彼は面倒くさそうに、探しましたよと王子に近づく。王子は彼の姿を見て、とても不快そうに顔を歪めた。

「……アルベルト」

「あまり勝手にうろつかないでください。面倒なんです」

「何か用か？ 今忙しいんだが」

「え？ 人妻にちよつかいかけているようにしか見えませんか……。忙しいんですか？」
「なっ……!？」

随分と直球な物言いをする人だ。私は目を丸くした。

王子は顔を怒りで真っ赤にするが、嘘ではないので何も言い返せない。アルベルト卿はそんな彼を面白がるように揶揄^{からか}う。

「殿下は本当にジェフリーがお好きですよねぇ。嫌味言つてないで普通に話しかけりゃいいのに」

「おい、アルベルト。あまり失礼なことを言うな。クビにするぞ」

「はいはい。殿下をお探しの貴族方が列を成してお待ちですよ。さあ、どうぞこちらへ」

苛立った様子の王子は名残惜しそうに私の手を取り、その甲に口付けした。私は反射的に手を拭^ぬいたくなったが、ちゃんと我慢した。えらいぞ、私。

「またな、ミュリエル」

「……ええ、また」

私は頬を引き攣^{くわ}らせながらも、形だけの笑みを口元に乘せた。あの男が絡んでくるといつもこうだ。非常に疲れる。私は王子の姿が見えなくなったことを確認すると、小さく息を吐いた。

「最悪な気分です」

「最悪な気分だ」

被った。

私は兄様の腕の中から抜け出し、兄様の顔を覗き込む。兄様のお顔はかつてないほどに険しかった。

「ごめんなさい、兄様」

「何故君が謝るんだ。絡んできたのは殿下の方だろう」

「まあ、それはそうなのですけど。もう少し上手くあしらえれば良かったかなと」

「氣にするな。それよりも、ミュリエル。今日はもう帰ろう。なんだか疲れた」

「そうですね……。帰りましょう」

私はシルヴィアに挨拶だけすると、兄様に手を引かれて会場を後にした。

帰り道。私は車窓から夜空を仰ぎ、そっと目を閉じた。

舗装されていない石畳をひた走る馬車の振動と、求愛する虫の音が耳に残る。まるで、私たちが世界に取り残されたみたいに静かだ。

ゆっくりと目を開けると、兄様が外に視線を向けたまま、物思いに沈んでいた。私はその横顔に、自然と意識を引き寄せられる。

「……何だよ」

「いえ、何も……。ただ、物思いに沈む兄様も素敵^{すてき}だなんて」

「そういうのはいいから」

「へへっ。……ごめんなさい」

何だかすぐく機嫌が悪いようだ。いつもよりも眉間の皺が深い。こういう時の兄様には話しかけてはいけない。私は笑みを崩さぬまま、そっと背もたれに身を預けた。

しばらくすると、兄様はバツの悪そうな顔をして口を開いた。

「……悪かったな」

「何がですか？」

「オズウェル殿下のことだよ。殿下は昔から俺が気に食わないんだ。だから突っかかってくる」

「仲が悪かったのですか？」

「まあな。殿下は……、その……、ヘレナが好きだったから」

兄様は気まずそうに姉様の名前を出した。

兄様によれば、殿下は学園時代のヘレナ姉様に一目惚れをしたらしい。しかし殿下が姉様にアプローチするよりも先に、姉様と兄様の婚約が決まってしまったのだとか。

「なるほど、だからですか」

馬鹿な男。私は内心で静かに嘲った。

だってそうだろう。兄様と姉様の婚約が決まったのは、二人が学園に入学して一年ほどが経ってからのこと。身分や状況を考えれば、殿下がひと言『ヘレナと結婚したい』と言えば、姉様と結婚できたはずだ。それなのに彼は二人の婚約まで、何も行動しなかった。そのくせ、他人のものになってから恋敵を妬んで絡んでくるとか。

「うん。やはり、兄様のせいではありませんわ。全ては小物な殿下のせいです」

「小物って」

「小物は小物です。だから出涸らしだと揶揄されるのです」

「おい。それ、外では言うなよ？ 不敬だから」

私はオホオホホ、と笑いながらも兄様から視線を逸らした。見なくても兄様が半眼でこちらを見

ているのがわかる。

しかし、仕方がないじゃないか、とも思う。だって私はできた人間じゃないから、あんな風に言われたら無意識に口から漏れてしまうことだってあるかもしれないわけで。

「ミュリエル？ 俺は結構真面目に言ってるぞ」

「ぜ、善処しますわ」

兄様がここまで真剣におっしゃるなら、努力はしよう。

「……ところでミュリエル。手を出してくれ」

「え？」

「いいから、早く」

「あ、はい」

早くと促された私は、躡けられた犬のように両手を兄様の右の掌の上に乘せた。兄様は私の手に視線を落とし、眉を寄せる。

「兄様？」

「やはり気になるからな。どっちだ？」

「何がですか？」

「オズウェル殿下に口付けられた手だ」

「ああ、右手です」

「そうか」

兄様は舌を鳴らすと私の右手の甲をハンカチで軽く拭いた。そして、何故か殿下にキスされた場

所と同じ所に口付けた。兄様の唇が触れたところが熱い。

「な、にを……？」

「消毒」

「……はい？」

「着いたようだな。降りるぞ」

「え？ え？」

困惑している私を横目に、兄様は馬車の扉を開けて外へ出る。そして私に手を差し出した。まさかのエスコートだ。私はおそろおそろ、その手を掴んだ。

「あの、兄様……？」

「……少し庭を散歩してから中に入ろう」

「え、あ……、はい……」

兄様は私の手を握ったまま、庭の方へと歩き出した。後ろから見上げてでも兄様の顔は見えない。だから彼が今、どんな表情をしているのかわからない。いつもなら馬車を降りてすぐに手を離すし、そもそも、いつもの兄様なら消毒なんて言って私の手に口付けることもしない。こんなの、まるで嫉妬しているみたいだ。

——なんてね

そんな訳ない。これは私に都合の良いただの妄想だ。だって兄様の心にはまだ姉様がいるのだから、嫉妬なんてするはずがない。

これ以上自分にとって都合の良い勘違いをしたくない私は、そっと手を離そうとした。けれど、



兄様は私の手をさらにギュッと握りしめて離してくれなかった。

「あの、兄様。そろそろ手を……」

「……月が、綺麗だな」

「え？ ああ、はい。そうですね？」

夜空を見上げた兄様は不意にそんなことを呟いた。私もつられて空を見上げたが、今夜の月は綺麗な満月でもなければ三日月でもない。満月と半月の間くらいの少し欠けた形をしており、綺麗と言うには惜しい姿をしていた。

普段、こんなこと言う人じゃないのに。どうしたのだろう。私は不思議に思い、兄様の顔を覗き込んだ。すると、兄様は何故か顔を真っ赤にしていた。

「……え、顔が赤いですけど」

「うるさい」

「もしかして、酔ってますか？」

「……かもな」

「そんなにお酒をたくさん飲んだのですか？」

断りきれず、勧められるままに飲んでいたのである。特段お酒に強いわけでもないのに、やはり不器用な人だ。口をへの字にして不貞腐れる兄様を見て、私は肩の力が抜けた。

良かった。いつもの可愛い兄様だ。

「……安心したのか？」

「え？」

「いや、何でも」

兄様はどこか寂しそうな顔をして私の手を離し、距離をとった。

「そろそろ中に入ろうか。体が冷えてきた」

「そうですね」

少し欠けた月が照らす庭園。花の香りとそよぐ夜風。兄様はいつもの兄様に戻ったように、私の手を引くことなく先を歩く。私は兄様の半歩後ろを歩いた。私は昔から、後ろから見上げた時の兄様の顔が好きだった。表情はよく見えないけど、この角度から見ると兄様が一番好きだ。

「ねえ、兄様」

「何だよ」

「大好きよ。本当に」

「……」

兄様は私の告白に何も返さない。それもいつものこと。けれど、なぜだろう。今日の兄様の無言はただの照れ隠しにしか思えなかった。自意識過剰だとわかっていても、私の胸は高鳴ってしまっただけ。

そんな夜会から数日後のこと。珍しく朝食の席にやって来た兄様は唐突に、私にアルベルト卿を紹介したいと言ってきた。あの夜会が初対面だったので知る由もなかったが、彼は兄様の数少ないご友人なのだそう。兄様に親しい誰かを紹介されるなんて初めてのことで、二つ返事で了承した。「お義母さま、今朝の話なのですが……。これは、もしかするともしかするのではないでしょ